

# 錢形平次捕物控

詭計の豆

野村胡堂

青空文庫



## 一

「親分、四谷忍町の小松屋おしやというのを御存じですか」

「聞いたことがあるようだな——山の手では分限ぶげんのうちに数えら  
れている地主かなんかだろう」

銭形平次が狭い庭に下りて、道楽の植木の世話を焼いていると、  
低い木戸の上に顎あごをのつけるように、ガラツ八の八五郎が声を掛  
けるのでした。

「その小松屋の若旦那の重三郎さんを案内して来ましたよ。親分  
にお目にかかるて、お願ひ申上げたいことがあるんですつて」

そう言えばガラツ八の後ろに、大町人の若旦那といつた若い男が、ひどく脅おびえた様子で、ヒヨイヒヨイとお辞儀をしているのです。

「お客様なら大玄関から——と言いたいが、相変らずお静が日向を追つかけて歩くから、あそこは張板で塞ふさがっているだろう。こつちへ通すがいい」

「へッ、そこは端近、いざま——ずっと来たね。若旦那、遠慮することはない。ズイと通つて下さいよ」

八五郎の剽ひょうきん 軽さそな調子に誘さそわれるよう、身扮みなりの凝こつた、色の浅黒い、キリリとした若いのが、少し卑屈な態度で、恐る恐る入つて来ました。せいぜい二十歳そこそこでしようか、まだ世馴

れない様子のうちに、妙に野趣を帶びた、荒々しさのある人柄です。

「あつしは平次だが——小松屋の若旦那が、どんな用事で、こんなところへ来なすつたんだ」

縁側へ席を設け<sup>もう</sup>さして、平次は煙草入を抜きます。調子は間違  
いもなく客を迎えるながら眼はまだ庭に並べてある、情けない植木  
鉢に吸い付いて、その若い芽や、ふくらんで行く蕾<sup>つぼみ</sup>を享樂してい  
るのでした。

「思案に余つて参りました——私の身に大変なことが起つたので  
ござります」

「大変なことにもいろいろあるが」

平次の瞳はようやくこの若い客に戻りました。持物も、身扮も、  
申分なく大商人の若旦那ですが、物言いや表情や身のこなしに、  
一脈の野趣といおうか、洗練せんれんを経ない粗雑さの残るのはどうし  
たことでしょう。

「——私は、殺されかけているのでござります。親分さん」  
「それは容易じやないな、詳くわしく話してみるがいい——が、その  
前に、お前さんの身の上を聴いて置きたいな。お前さんは小松屋  
の若旦那で、素直に育つて來た人じやあるまい。昨今田舎から出  
て來たのか、それとも——」

銭形平次の首はむづかしく傾きます。

「恐れ入りました。親分さん、私の身上には、人様が聞いても本

当にはしないだろうと思うような大変なことがござります」

「その大変なことから話して貰おうじやないか」

「…………」

若旦那は、少しばかりモジモジして居ります。それは容易ならぬ重大事らしく、言つたものか、言わずに済ましたものか、ひどく迷っている様子です。

「言つて悪いことなら別に聽こうとは思わないが——」

「いえ、良いも悪いもございません。皆んな申上げてしまします。

親分さん

「それが上分別というものだろう」

「何を隠しましよう、私は——」

「……」

「この私は、ツイ二年前までは、両国の橋の下を宿にして、使い走りから、日手間取り、たまにはあぶれて、人様の袖に縋つた、なきれない宿なしだつたのでございます」

若旦那は思い切つた調子でこう打ち明けると、懐から手拭を出して、額ひたいぐち口の汗などを拭いております。

「それはまた変り過ぎて いるじやないか」

平次もツイ居住いを直しました。木戸のところにぼんやり立っている八五郎も、四方あたりに気を配りながら、聴耳を立てて いる様子です。

## 二

「私はどこで生れて、親がなんというものかそれも存じませんでした。さいしょは軽業かるわざの南左衛門という親方のところで、玉乗りやブランコの稽古けいこをさせられておりました。どうやら一通りの芸を仕込まれると——四つ五つから、十四五まで、関東から甲州、信州へかけて、旅から旅と興行を続けておりましたが、今から五年前、親方の南左衛門が江戸へ出て両国に小屋を掛けて興行をしたとき、贋金にせがね使いに掛け合つて、親方の南左衛門は死罪、一座の者は遠島、追放、所構ところがまえとバラバラになつてしましました。

私はまだ前髪立ちで、親方の悪事などは夢にも知らず、お蔭で罪

は免まぬかれましたが、その代り江戸の真ん中へ、頼る人もなく投り出されてしまったのでござります」

小松屋の若旦那重三郎の話は、世にも怪奇を極めます。

「江戸に知り合いが一人もなく、見世物や軽業は、構われたも同様で、今さらほかの一座に割込むわけにも行かず、よしんばまた私を使つてくれるところがあつたにしても、あの仲間に戻るのは、私の方で真つ平御免だと思いました。お猿や犬の太夫と同じように、食物と鞭むちとで馴され、命がけの危ない芸当をさせられるくらいなら、私は餓死した方が余つほど優ましだと思つたのでございます。

——私はなんの分別もなく両国の橋の下に潜り込んでしまいま

した。昼はあつちこつちの小屋へ行つて掃除を手伝つたり、使い走りに飛んで歩いたり、夜は橋の下に帰つて、同じ宿なしの仲間と、筵むしろを引つ張り合つて寝ましたが、一年三百六十五日、貰いがあつて、三度のものにありつけるとは限りません。どうかすると二日も三日も空腹を抱えて、往来の人の袖や袂にも縋らなければならなかつたのでござります。

——こんな事を申上げるのは、本当に恥かしい事で、身を切られるように辛いことには違ひありませんが、近ごろの私の身に起つた、不思議なことを解つて頂くためには、やはり皆んなお話しで、親分の知恵を拝借するほかはございません。

——今から二年前、私が十八の年の春でございました。**大店**おおだな

の番頭さんらしい人が、両国の橋の下にいる文吉と名差しで訪ねて来て——申し忘れましたが、私の元の名は文吉でございました——その番頭さんは、私を人のいないところへ連れて行つて、いきなり——お前は元南左衛門の軽業小屋にいた文吉に相違ないだろうな——と申します。私がそのとおりだ、怪しいと思うなら、誰にでも訊いてくれ——と申しますと、それでよかつた、実はお前の本当の身の上がわかつたのだ。誠の親にも引合せ、大家の若旦那の身分に直してやる。一緒に来い——とこう夢のようなことを申すのでございます。

——あまりの事にびっくりして、そんな馬鹿な事があるものか——と申しますと、いや馬鹿か馬鹿でないか、乗込んでみればわ

かることだ。どこへ突出されたつて、今より悪くなりつこはあるまいから、黙つて一緒に来るがいい、とも申しました。

——後でいろいろ訊いてみると、私は四谷忍町の小松屋の一人息子で、重三郎というのだそうですが、小さいとき悪者に誘拐かどわかされて軽業小屋に売られたものらしく、今まで行方がわからなかつたが、フトした事から、南左衛門の一座にいた文吉というのが、その重三郎に違いないと、わかつたということでござります。もつとも小松屋はその後甥おの吉太郎というのを養つて、跡取ということにしておりましたが、この吉太郎が道楽を覚え、さんざん放ほ埒うらつの限りを尽した揚句、勘当されて相州厚木あつぎへやらされているとも申しました。

それはともかくとして、番頭さんは私をつれて、すぐ四谷忍町の小松屋へ乗込むのかと思いましたが、そうではなくて、いきなり草鞋わらじを履はいて、小田原へ参りました。そこには、かねて番頭の知合の家があつて、小さい旅籠屋はたごやをしていたのでござります。

——私はその旅籠屋に預けられて、一年のあいだ若旦那らしくなるように修業させられました。第一が言葉から、立居振舞、読み書き、着物の着よう——何より大事なことは、二三年の野天暮しで私の身体や顔が、すっかり陽焦ひやけがして、乞食臭くなつないので、それを世間並の人間らしく戻すには、どうしても一年はかかつたのでございます。

——これでどうやらこうやら、若旦那らしく見えると折紙を付

けられて、今からちょうど一年前、私は小松屋へ乗込んで参りました。その時はもう小松屋の主人——私の父親の市太郎が亡くなつて、叔父の安兵衛が店を支配し、手代小僧を使つてやつておりました。

——私を両国橋の下から拾いあげて、小松屋へ連れていったのは、小松屋の番頭の忠五郎と申す者でござります」

### 三

小松屋の若旦那重三郎の話は、なお続きます。

「番頭忠五郎は名前のとおり大の忠義者でございます。甥の吉太

郎が放埒ほうらつのために勘当になると、私の昔の乳母だった、お安と  
 いう女を葛西かさいから捜し出して来て、いろいろ訊ねた末、そのころ  
 私をさらつた者の人相から、小松屋を怨む筋の者を手繩たぐいつて、と  
 うとう私が四つの年に輕業師の南左衛門に売られたということを  
 突きとめ、それから、左二の腕に、火のような赤い痣あざのあることを  
 を聴出して、それを証拠に私を捜し出しましたが、橋の下から拾  
 つて行つたのでは、親類方も世間も承知しないだろうと、小田原  
 へ一年預けて、どうやらこうやら昔の垢あかを洗い落し、小松屋へ乗  
 込めるようにしたのでございます。

——そこまでは無事でございましたが、主人——私の父の市太郎が亡くなつてしまえば誰に遠慮することもないはずだ、勘当と

いつても、一時の懲<sup>こら</sup>しめだから、甥の吉太郎を厚木から呼寄せるのが順当だと申して、私には義理の叔父で、小松屋の支配人をしている安兵衛と申すのが、獨りで頑張<sup>がんば</sup>つて、とうとう甥の吉太郎を、店に呼び寄せたのでございます。

——これは私と同じ年の二十歳でございますが、長いこと小松屋の店に坐つておりましたので、算盤<sup>そろばん</sup>にも帳面にも明るく、その上男がよくて如才がなくて、叔父の安兵衛が巔<sup>ひいき</sup>頭にするのも無理のない男でござります。たとえ一度は勘当になつても、私に取つても従兄弟ではあり、なんとか身の立つようにしてやろうと、

私も精いっぱい心掛けては居りますが、困つたことに、その従兄弟の吉太郎が帰つて来てから、いろいろの面白くないことが起る

のでござります。

——第一番にまず、お浜——これは遠縁の娘で、今年十八になりますのでございますが、ええ、まあそういつたようなわけで、最初は吉太郎に娶<sup>めあ</sup>わせるつもりで、亡くなつた父の市太郎が、親類から貰つて育てて居りましたそうで、父親が亡くなつて、吉太郎が勘当された後は、自然——へエ、その私の許<sup>いいなづけ</sup>婚<sup>きやしゃ</sup>のような恰好になつておりました。申すまでもなく当人もそのつもりで、へエ、綺麗な娘でございました。細面の、少し華奢<sup>きやしゃ</sup>な、なんとか小町と言われたきりようで、へエ。

——そのお浜が、可哀想になんということなく氣分が勝れなくなり、一ヶ月ばかりの間に、大した病氣というでもなく、水の切

れた生花<sup>(いけばな)</sup>のよう、しおしょと弱つて死んでしまいました。可哀想に、あんなに綺麗で優しかった、お浜が——医者は 瘡症<sup>(ろうしよう)</sup>だと申しますが、咳<sup>(せき)</sup>一つしない瘡症<sup>(ろうがい)</sup>というものがあるでしょうか、瘡症は 瘡咳<sup>(ろうがい)</sup>と申しまして、咳のひどい病気だと聴いておりますのに。

——そればかりではございません。それから引続いてお安という女——これは私の小さい時の乳母<sup>(うば)</sup>で、私の左二の腕に、赤い痣<sup>(あざ)</sup>があると言つてくれた、私のためには大事な見知人で、この世で一番大事な恩人でございますが、そのお安という五十過ぎの乳母が、番頭の忠五郎に葛西<sup>(かさい)</sup>の在にいるのを捜し出され、小松屋へ来て二度目の奉公をしているうちに、私の許嫁のお浜と同じような

病氣にかかり、しおしおと弱つて行つて、七日ばかり前に亡くなつたのでござります。

——それだけですと、物事の廻り合せと思い諦めておりますが、今度は、肝心要かなめの番頭の忠五郎が、同じ容体になつて、もう枕も上がらない有様でござります。申すまでもなく忠五郎は、両国の大橋の下から、私を拾つてくれた大恩人で、この世にかけ替のない人間でございます。その上、小松屋に取つても大黒柱で、忠五郎がいなくなつては、支配人といつても叔父の安兵衛では店は持ち切れません。私の力で出来ることなら、なんとしてもこの番頭の命を取止めようと、いろいろ骨を折りましたが、今となつてはどうにもなりません。

——私が小松屋へ帰つてから、だんだん聴いてみると、私の父親が亡くなつたのも、同じ容態だつたということですございます。その上、これは大事なことです、近頃では、この私もなんとか身体がダルくときどき嘔氣はきけがしたり、目暈めまいがしたり、どうも尋常ではございません。万一この私が寝込むような事があれば、小松屋の身上はどうなることでしょう。叔父の安兵衛も道楽強いうえ、甥の吉太郎と来ては一度勘当されたほどの遊び好きでござります。

——銭形の親分さん、重々無理なお願いだとは思いますが、私を助けると思つて、一度四谷忍町までお出でを願えませんでしょうか。銭形の親分さんのお顔を見たら、どんな太い量見の悪者で

も、そんな無法なことは止すかもわかりません。私はなんとして  
も、番頭の忠五郎の命を助け、この私と小松屋の上に降りかかる  
恐ろしい災難を取扱いたいと存じます」

#### 四

若旦那重三郎の話は、ずいぶん変つたものでしたが、平次は急  
所急所に極く短かい問い合わせを挟みながら、なおもその話をつづけさ  
せたのです。

「同じ容態で、幾人も幾人も死んで行くのが素人の私にも不思議  
でなりません。そこで町内の本道（内科医）の玄庵げんあんさんに訊い

てみますと、そのお医者の申すには、私もそれは不思議に思つて  
 いるが、確かな証拠がないことを、差出がましく申出でて、世間  
 を騒がせるわけには行かない。が、三人の容態を見たところでは、  
 最初にいちおう強い毒薬を呑ませて足腰の立たないようにして置  
 き、それから毎日の食事なり飲物なりに弱い毒を仕込んで、ジリ  
 ジリと殺して行くのであろう。その毒がどんなものか、それも良  
 くは判つていない、と申すのでございました。

——それでは可哀想にお浜もお安も、一寸試<sup>だめ</sup>し、五分試しに殺  
 されたようなものでござります。どんな仕掛けで、そんな虐<sup>むご</sup>たら  
 しいことが出来るか——私も一生懸命でございました。お医者の  
 胸倉を掴むようにして訊きますと、今のところはつきりした事は

言われないが、夜中に誰も気が付かないようにそつと起き出して、病人の部屋に忍んで行き、その病人の湯呑なり、水差しなり、または朝起きてすぐ呑む煎藥せんやくなりに、毒薬を投り込む者があるに相違ない。日中ならすぐ人に見とがめられるし、病人も気が付くから、これは、夜中人の寝鎮ねしづまつた時の仕業に相違ない、とこう申すのでございます。

——私はしばらくの間、夜の目も寝ずに、忠五郎の部屋の外に見張つておりましたが、私が見張つていたのでは、悪者に用心させるだけで、なんの役にも立ちません。そこで、いろいろ考えた末、これは人様から聴いた話でございますが、ほんの少しばかりの仕掛けをして、夜中誰が起出すか、それを見付けようと思ひ立

つたのでございます。

——その仕掛け申すのは、家中の者が別々の部屋に休んでおりますので、その部屋の出入口の敷居に、豆を一と粒ずつ置いたのでございます。御存じのとおり豆はよく動きますが放つて置いたのでは、独りでは、転がりません。出入口の敷居に、戸の側にピタリと付けて、一と粒の豆を置けば、戸を開けるとその豆は必ず動きます。

——この仕掛けはまことに手軽で、その上、夜中部屋の外へ出た者を、一ぺんに見<sup>みあら</sup>露わしてくれます。それに、誰の部屋も一様の造りで敷居は外にあって、豆は外から置けますので私は誰にも知れないよう、皆んな寝た後で家中の者の部屋の敷居に、一粒ず

つの豆を置きました。すると、どうでしよう翌る朝早く見廻ると、豆の動いているのは、甥の吉太郎の部屋と、死にかけている番頭の忠五郎の部屋だけだったのでござります。

——甥の吉太郎どんの事を、かれこれ申しては、私としては、誠に相済まぬことでございますが、忠五郎と私の命には替えられません。——夜中に小用に起きたかも知れないと仰しやるのですか、とんでもない、十九や二十歳の若い者が、寒い時分ではなし、夜中に小用などに起きていいものでしようか。

——それから、私の部屋には豆を置かなかつたかと仰しやるのですか。え、え、それは置きました。私も近頃は、ジリジリ毒害されているに違ありませんので、念のために私の部屋の敷居に

も置いてみましたが、やはり私の部屋の敷居の豆も動いていたのでございます。——夜中に私の部屋へも入つて来る者があることは間違いもございません。私はまた若い者の癖に夜中に水を欲しがる癖がありますので、枕元には水差しを置いて寝るのでございます。

——それから私は、念のために、私の枕元に置いてあつた水差しを、そつと封印して、町内の本道玄庵さんに持つて行つて見て貰いました。するとなんと恐ろしいじやございませんか、石いわみ見銀山鼠捕りが、ほんの少し、うつかり水を呑んだくらいでは気が付かないほど入つていたのでございます。玄庵さんは申しました。毒薬は極く僅かだが、あれを毎晩呑まされて居ては、とても

たまらない。と、恐ろしいことでござります。

——銭形の親分さん、なんとかしてこの恐ろしい下手人を縛つて、忠五郎を助ける手段はございませんでしようか。忠五郎ばかりではございません。この儘にして置くと、いざれば私も殺されるに決つております。現に私の部屋の敷居の豆は毎朝動いておりますし、私の気分は一日一日と悪くなつて参ります。そのうちに私もどつと寝込むようになれば、誰が忠五郎を助けてやることが出来るでしょう。

——それだけでは、確かな証拠がないと仰しやるのですか、——  
——私の左二の腕をお目にかけましよう。この痣あざ——小さいが火のような赤い痣があつたばかりに、それを見知つていた、乳母のお

安は殺されてしましました。可哀想に気の良い女でございました。  
近いうちに親類方がお顔を合せることになつておりますが、お安  
にそれを言い立てられると、小松屋の跡取りは間違いもなくこの  
私ということになりますので、私を蹴落すけおと前に、まず生き証人の  
お安を殺したのでございましょう。

——お浜はまた少し綺麗過ぎました。な亡くなつた父親が、なま  
じ吉太郎に娶合せようとしたのが仇で、吉太郎が勘当された後、  
私というものが乗込んで来て、お浜と天下晴れて許婚になると、  
吉太郎が厚木から帰つて来て納まらなかつたのも無理はないこと  
でございます。吉太郎にすれば、お浜をこの私に取られるより、  
一と思いに殺した方が、どんなに晴々するかわかりません。

——親分さん、お願いでござります、お浜とお安と二人を殺し、こんどは忠五郎を殺そうとしている極悪人ごくあくにんを、これからすぐ四谷忍町まで行つて、縛つて下さい、お願いでござります」

若旦那の重三郎は、縁側の上に手を突いてポロポロと涙を流しながら、銭形平次を伏し拝むのでした。

## 五

「親分、若旦那があんなに言うんだ。一とつ走り四谷へ行つて、その下手人を挙げて来ようじやありませんか」

ガラツ八の八五郎は、すつかり感激して、平次の前に突つ立つ

ておりました。少々むくつけき感じですが、この若旦那は全く見掛けに寄らぬ雄弁です。

「よかろう、二人殺して、ヌケヌケと三人目を殺しにかかる奴は、放つちや置けない」

「じゃ出かけましようか」

八五郎はすっかりいきり立つて居ります。長いあいだの習慣と、この男の正義感で、悪者が眼の前にヌケヌケとしているのは我慢が出来なかつたのです。

「心配するな、曲者は四谷じやないよ」

「えツ」

「そこに居るじやないか、それ」

銭形平次の指は、ピタリと若旦那の重三郎を指して居るではありますか。

「親分？」

八五郎の勘の悪さ。

「その男が下手人だよ、威勢よく、御用ツとやるがいい」

平次の言葉のおわるを待たず、重三郎はサツと身を翻ひるがえしました。

が、早くもその気勢を察して、退路を絶つた八五郎。

「野郎ツ」

無手むんずと組んで行くのを、恐ろしい剛力で、ハネ飛ばして、一氣

に外へ。

「待て」

がつづく平次は、その前に立塞たちふさがつっていたのです。

「畜生ツ」

重三郎は兎きょう 暴うばう 極きわまる曲者でした。長いあいだ軽業小屋で鍛きたえた強きょう 鞣じんな身体と、恐ろしい気転とで、ともすれば平次と八五郎の手を免まぬかれて逃出そうとしましたが、久し振りに錢形平次の掌から投げられた五六枚の錢に、その戦闘力をすつかり封じられて、

「野郎、骨を折らせやがる」

八五郎の手でどうやら縛りあげてしましました。

繩付を下つ引に預けて、平次と八五郎が四谷忍町おしに飛んで行くと、正に小松屋の内情は重三郎が言つたとおりでした。

迎えてくれた叔父の安兵衛は五十前後の着実な男、甥の吉太郎というのは、如何にも一と癖ありそうで、正直者らしきうちにも、容易に重三郎の手には乗るまじき気魄きはくが見えました。

番頭の忠五郎は重態でしたが、毒を盛つたのが若旦那の重三郎と聴かされると、

「悪いことは出来ません、皆んな私の至らぬことから起つたことでござります」

と、苦しい息の下から懺悔ざんげをします。その言葉によると、番頭の忠五郎は養子の吉太郎と折合が悪く、いざれは店を追出されそうになつたので、亡くなつた主人に、有ることないことを告げ口して吉太郎を勘当させ、その代りに乳母のお安を抱き込んで、お安

の知合の倅、両国の軽業小屋から流れ出した、文吉を若旦那に仕立てて、小田原で磨きをかけた上、主人の死んだ後へ乗込ませたのです。

ところがこの重三郎の文吉は容易ならぬ悪者で、自分の言うことを聽かぬお浜をさいしょに殺し、つづいて自分の弱点を知り抜いているお安を殺し、それから自分の素姓を知っている番頭の忠五郎までも殺そうと企らんだのでした。<sup>たく</sup>

味方をまず殺してかかる恐ろしい陰謀で悪賢こい忠五郎もそこまでは気が付かず、危うく一命を棒に振るところだつたのです。

叔父の安兵衛は正直者で御しやすいが、甥の吉太郎は頭も腕つ節もできているので、容易に手を下しようがないため、三人殺し

の罪を背負わせて、平次に処分させようとしたのが重三郎の重大な錯謬あやまりでした。銭形平次は重三郎の長物語の中から、幾つかの矛盾むじゅんを見出して、その場を去らせずこの曲者を縛つてしまつたのです。

## 六

一件が落着してから、八五郎は訊ねました。

「どうして重三郎が悪者と判つたんです。親分」

「なんでもないよ——橋の下から大家の跡取りをさがし出したといふのは、話が少しウマ過ぎたよ。あんなに手軽にわかるものな

ら、父親の市太郎は十五六年も放つておくはずはないじやないか。  
 それに本当の跡取なら、少々陽ひに焦けていても、言葉遣いや折屈みが下手でも、すぐ小松屋へ伴れ込むのが本当じやないか。

わざわざ小田原まで連れて行つて、行儀作法を習わせたと聴いて、  
 お前は変だとは思わなかつたか」

「へエ」

ガラツ八はどつちつかずの返事をしました。

「それに、重三郎はそんなたいした男じやないし、なんとか小町に好かれそうな人柄でもない。江戸の町娘は見識が高いから、親の気に入らなくて勘当された許婚を、一年も経たないうちに忘れて、あんな埃りつほこ臭い荒っぽい男に惚れるはずはないよ」

「なるほどね」

ガラツ八もそれは簡単に承服しました。自分も埃っぽくない男のカテゴリーに編入されるつもりでしよう。

「もう一つ、こいつは大事なことだ、敷居へ豆を置いて、亭主の浮気を見破つた、嫉妬焼やきもちやきの女房の話はおれも聴いたことがある——あれは面白い仕掛けだと思ったが——重三郎に、お前の部屋にも仕掛けて置いたのかと訊くと、仕掛けて置いたと言つたろう」「…………」

「その上、念入りに朝になると自分の部屋の敷居の豆も動いていたと言つたはずだ」

「…………」

「自分の部屋の敷居の豆が、動いているか、動いていないか、自分にわかるはずはないじやないか、——朝になつて、それを見ようと思つて、唐紙か障子を開けると、豆は必ず動くに違ひない——どの部屋も同じ造りで、敷居は外にあつて、豆は外から置けると言つたろう」

「あツ、なアーる程」

八五郎が、すっかり恐れ入つてしましました。

「おまけがもう一つあるよ」

「へエ」

「お前も見たはずだが、重三郎の左二の腕の赤い痣あざ——チラと見せたが、あれは痣じやない、朱の入墨いんぼくだつたよ」

「……」

「重三郎は間違いもなく偽者だ——お安を殺して、忠五郎も亡きものにしようとしたのは、偽者と知っている者を殺して、ぬくぬくと小松屋の跡取りになるつもりだつたのさ。お安と忠五郎が生きているうちは安心が出来ないし、その上弱い尻を押えて居る忠五郎に絞られて、それがうるさかつたんだろう。叔父の安兵衛は確り店を預かつて、重三郎の儘にさせないから、自分の足場を確りと据えた上で、こんどは安兵衛を殺す気になつたかも知れな

い」

「それほどの太てえ奴が、なんだつて親分のところへ来て、両国の橋の下から拾われたの、乞食までしたのと、余計なことをペラ

ペラしゃべつたんでしょう。黙つて居りや知れずに済むことじゃありませんか」

八五郎には重三郎の打ち開けた態度が、藪蛇としか見えなかつたのです。

「そう思うのもいちおうもつともだが、お前はあの重三郎を見て変だとは思わなかつたか」

「へエ？」

「あれを、四谷忍町の小松屋の若旦那と聞いて、変には思わなかつたかと訊いているんだよ」

「変でしたよ、何処か荒っぽいところがあつて——身扮みなりも言葉遣も大店の息子らしくはしていましたが、顔の色が妙に陽焦げがし

て いるし、声が少し 塩辛しおからで、手足も妙に荒れていましたね」  
 重三郎には全く大店の若旦那らしい線の柔らかさというものが  
 なかつたのです。

「其処だよ——重三郎も自分でよくそれを知っていたのだよ、お  
 れの眼は胡麻化ごまかせないと思つたから訊かれるとすぐ身の上を打ち  
 開けて正直そうに持ちかけ、しんみりさせて自分を信用させるつ  
 もりだつたのさ。隠していたところで、永い間にはいずれわかる  
 事だし小田原へ人をやつて、それからそれと手繰たぐれば、両国橋の  
 下の古巣まで露見するよ」

「なるほどね——そんな危ない橋まで渡つてなんだつて、親分の  
 ところへ来たんでしょう。あんな具合にすぐ縛られちや、割が合

わないじゃありませんか」

「忠五郎の口から、いろいろの事がバレそうになつて居たんだろ  
う。忠五郎も悪い奴で、重三郎に毒害されて黙つて死んで行くよ  
うな生<sub>なまやさ</sub>優しい人間じやない——それに」

「それに？」

「悪党の自惚<sub>うぬぼ</sub>れだよ、悪党に自惚がなきやア、こちとらの仕事  
はあがつたりだ。重三郎も多分平次の懷中に飛込んで、存分に躍<sub>おど</sub>  
らせてやろうと思つたんだろう。甘く見られたんだね」

平次はそう言つて苦笑いをするのです。



# 青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物控（九） 全十冊」角川文庫、角川書店

1958（昭和33）年6月20日初版発行

1968（昭和43）年3月30日11版発行

初出：「オール讀物」文藝春秋新社

1947（昭和22）年5月号

入力：結城宏

校正：江村秀之

2020年3月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 銭形平次捕物控

## 詭計の豆

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>